

S21 放射線膀胱炎患者に対する高気圧酸素治療

中田瑛浩¹⁾ 久保田洋子²⁾ 原野和芳¹⁾

卯坂道博¹⁾ 篠田雄一¹⁾ 吉田泰行³⁾

下村浩二¹⁾ 大柁雪乃¹⁾ 酒井飛鳥¹⁾

- 1) 四街道徳洲会病院 泌尿器科
- 2) 山形県立置賜総合病院 泌尿器科
- 3) 千葉徳洲会病院 耳鼻咽喉科

【目的】放射線膀胱炎患者に対する高気圧酸素(HBO)治療はWeissら(1985)(1)により最初になされ、以後、急速に世界に広まった。しかし長期間の追跡調査は少なく、その有効性についても相反している(1, 2)。しかも最近では再発症例も散見するようになった。演者は31例の本疾患患者にHBO治療を施行し、やく10年間経過観察によりHBO治療が真に放射性膀胱炎患者に有効か否かを検討した。

【方法】62±2歳の31例の本疾患患者に絶対圧2気圧、1回90分のHBO治療を施行した。各患者のHBO治療は59±3回で、被曝放射線量は68±3Gyであった。10例の患者はHBOの追加治療が必要であった。フォロー期間は9.8±0.5年であった。

【結果】Subjective symptomの頻尿、排尿痛、尿失禁の改善率は夫々88%, 92%, 96%であった。Objective symptomの輸血必要率、尿中赤血球数、膀胱鏡所見の改善率は夫々100%, 87.1%, 90.3%であった。再発患者は非再発患者より8歳年長であった(p<0.05)。最終照射よりは本疾患発生時期までの期間は再発患者のほうが非再発患者より45.8%「p<0.05」短かった。再発患者の被曝線量は非再発患者のそれより44.2%「p<0.01」高値だった。

【考察および結論】非再発患者21例、再発患者10例にHBO治療後の長期経過観察をおこない、高齢患者で被曝線量の高い例では治療に難渋するもののHBOのintermittent therapyが有効であると推測された。

S22 予防的高気圧酸素治療による脳定位手術的照射後の放射線障害抑制効果

大栗隆行

産業医大放射線科

【目的】脳の定位手術的照射(SRS)の重大な副作用に放射線障害がある。我々は、放射線障害の発生が懸念される転移性脳腫瘍の症例に対して、SRS施行後に高気圧酸素治療(HBO)を行なってきた。今回、HBOによる放射線障害の予防効果を比較検討した。

【対象と方法】1994-2003年にSRSを行った78例の転移性脳腫瘍患者を対象とした。32例にSRS施行後にHBOを1ヵ月間(週5回、20回)行い(HBO群)、HBOを追加しなかった残りの46例を対照(非HBO群)とした。HBO群32例中21例は全脳照射等の通常分割照射を併用した症例で、残り11例は長期予後が期待可能な原発巣が制御され脳以外に転移病巣のない症例や若年症例であった。放射線障害は、白質障害と放射線壊死の2種類に画像上分類し、神経放射線科医が評価した。

【結果】放射線障害はHBO群に5例(11%) (白質障害2例、放射線壊死3例)、非HBO群に11例(20%) (白質障害9例、放射線壊死2例)認められた。ロジスティック回帰多変量解析で、白質障害の発生とHBO群に有意な相関はなかったものの(p=0.07)、白質障害の発生頻度はHBO群で少ない傾向にあった(p=0.05)。SRS施行1年後の白質障害発生率は、HBO群(2%)、非HBO群(36%)と、HBO群で有意に少なかった(p<0.05)。

【結論】SRS後の予防的HBOの施行は、放射線白質障害の発生を抑制する可能性があり、今後、更なる研究が望まれる。